

第6章

東南アジア海域世界の国家と海洋民

はじめに

東南アジア海域世界には古来より現在に至るまで、まことに広範囲にわたって文化的多様性を示す漂海民 (sea nomads) もしくは海洋民の存在が知られている。特に漂泊性が高く、家船を基盤とした海上生活をする漂海民の包括的な概況については、ソファー (D.E. Sopher) の、古典的とも言いうる研究があるが、これによれば東南アジア海域の漂海民 (バジャウ, サマ, サマル, オラン・ラウト等々と称される) の主たる分布域として、以下の地域があげられている (図1, 図2を参照)。

- (1) マレー半島西岸部。
- (2) 南シナ海 (リアウニンガ諸島などを含む)。
- (3) 北ボルネオ (現マレーシア連邦のサバ州) およびスールー諸島。
- (4) インドネシア東部。

これらの漂海民は、特にその漁撈活動を中心とする移動生活において、比較的自由に国境を横断する。土地 (=陸地) や国境やパスポートといったような、現代国家 (領域国家) が根源的に基盤とする〈陸の論理〉に対して、相対的に彼らは自由であると考えてよいだろう。他方では、現代国家の論理枠組みの中では、彼らの多くは、いわゆる周縁民族を構成し、中央政府にとって、定住化 (陸上生活化) や「文明化」の対象となってきた。

ところで東南アジア海域世界、特にマレー世界における歴史上の国家形成

図1 1500～1800年頃の漂海民の分布図

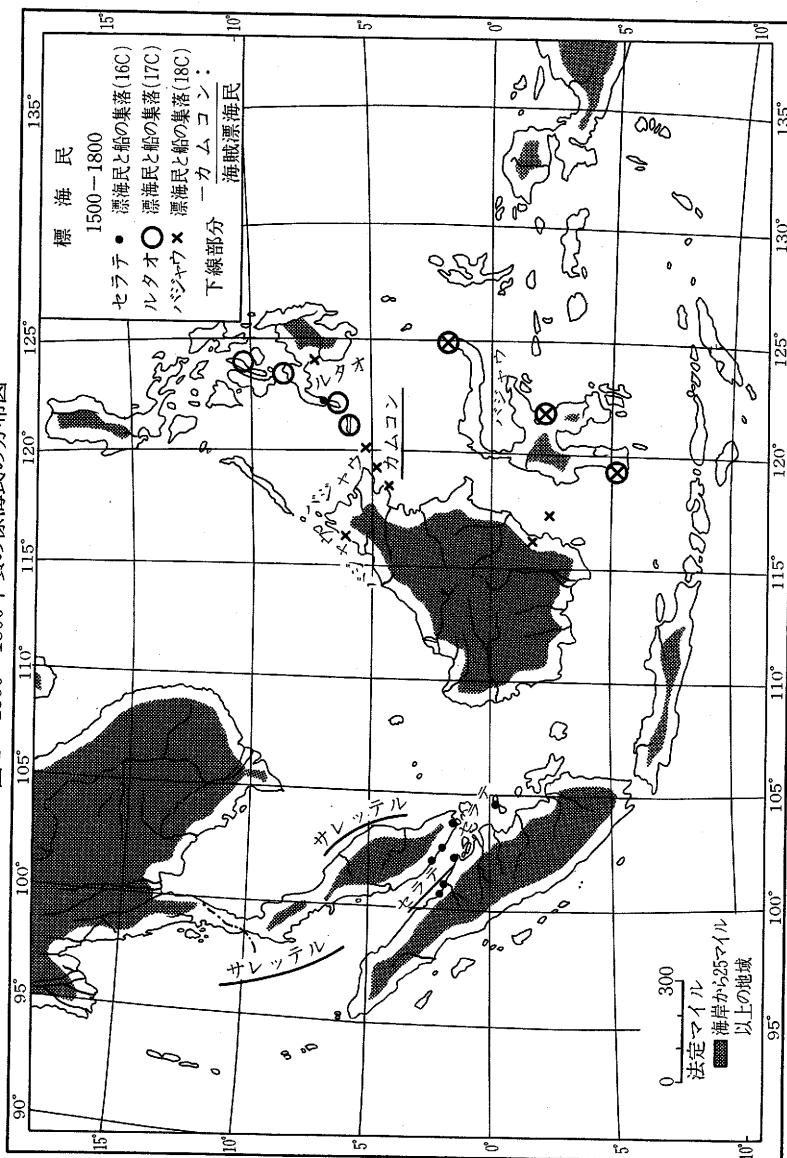
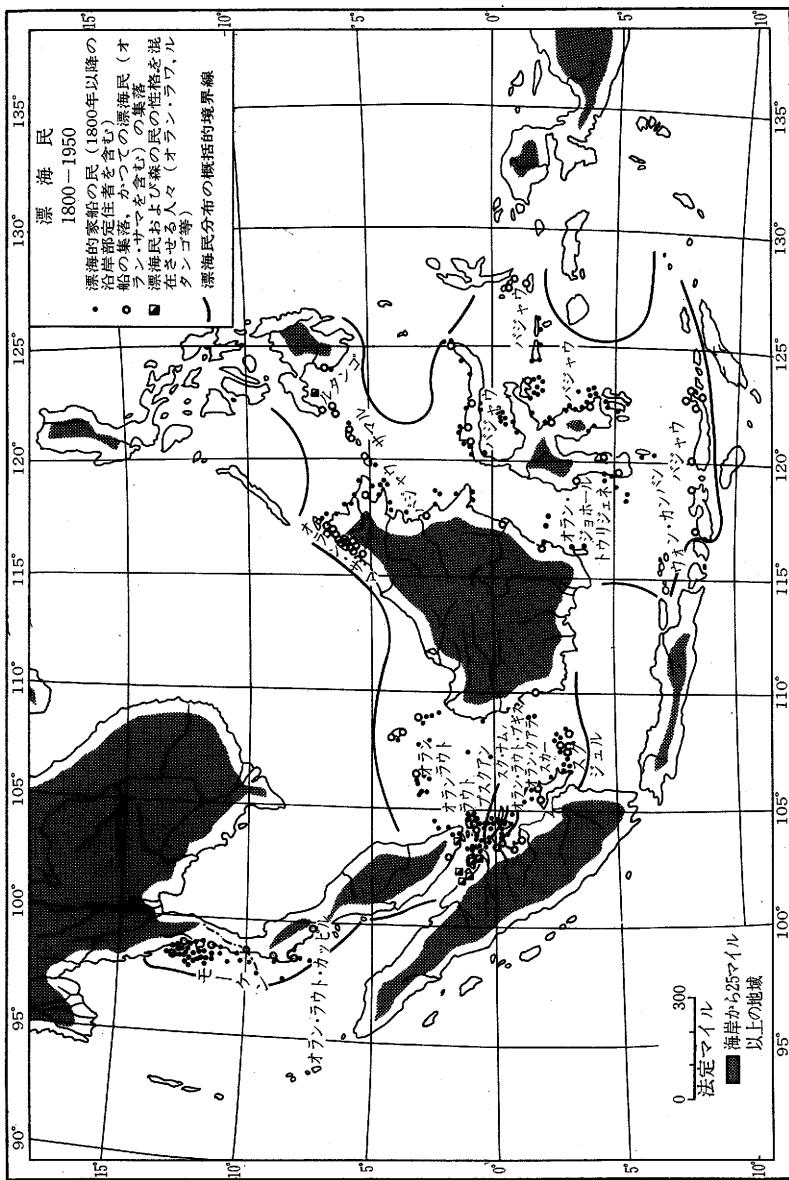


図2 1800～1950年頃の漂海民の分布図



(出所) Sophie [1977].

や、その政治・軍事・経済の運営・展開に際して、これらの漂海民あるいは海洋民が果たしてきた役割はきわめて大きかったことが、これまでの研究蓄積によって知られている。換言すれば、彼らの存在はまさにその漂泊性あるいは移動性のゆえに、伝統国家の本質的構造において不可欠といつてもよいほど重要なものであったと考えられている。

そこで本章では、まず歴史の中の国家（王国）形成と海洋民との関わりを概観して、東南アジア海域における島嶼国家の基本構造を探り、東南アジア研究で展開されてきた国家モデル一般との関係を考察する。続いて、現マレーシア連邦、サバ州海域の海洋民パジャウ族社会の事例研究を通じて、現代国家の枠組みの中での彼らの位置づけを、歴史上存在した国家の枠組みの中でのそれと比べながら、その現代における位相を明らかにしたいと思う。

第1節 歴史における王国と海洋民

——シュリーヴィジャヤ、パレンバンとマラッカ、ジョホール王国——

本節では15世紀初頭に成立した東南アジア島嶼世界における典型的な港市国家マラッカ王国を中心に、このマレー系王国の先行形態と考えられているシュリーヴィジャヤ、パレンバンおよび、マラッカ王国の系統を引くジョホール王国を含め、長期的な時間軸の中でも一貫して指摘されてきた政治・社会構造について整理しておきたい。

西アジア、インド、東南アジア諸国や中国を結ぶ海上交易の中継国際都市として発展したマラッカは、支配する対象は陸地自体というよりもむしろ、河や海、そしてそこを往来する人々自体であった。また一方で、15世紀前半にマラッカ王がイスラーム化したこと、ペルシャ、アラブ、インドなどのムスリム商人の往来はさらに一層、拍車がかけられたと想定されている。

アンダヤ (L. Andaya) は、ウォルターズ (O. W. Wolters) の見解を踏襲しつつ、このマラッカ王国が1511年にアルブケルケ率いるポルトガルによって

陥落した後、この王国の伝統を引き継いだマレー半島南域のジョホール王国をまとめて、マラッカ＝ジョホール王国の共通構造を論じようとしている。さらに彼はこの両王国に先行して建国されたシュリーヴィジャヤ＝パレンバン王国との構造上の連続性を含意する文脈の中で、特にオラン・ラウト (orang laut : 「海の人」, 「海洋民」) というように東南アジア島嶼部西海岸で総称される海洋民たちが、これら通算千年以上にわたって存在した歴史上のマレー系王国においてほぼ持続的に占めてきた重要な位置づけを強調している。

彼の見解によれば、特に7世紀頃から11世紀頃にかけて繁栄したシュリーヴィジャヤ＝パレンバン王国の時代に想定される王権と海洋民との密接な関係が、マラッカ王国の建国に際して復活したことである。マラッカ王朝の創設者のパラメスワラ (マラッカの王統を記す神話=歴史伝承『スヂャラ・ムラユ』のラッフルズ写本18号本におけるスリ・トゥリ・ブアナに対応する人物) が、1391～92年頃にスマトラのパレンバンにおいてアビシェーカ (abhiseka) と称するヒンドゥー的な聖別化儀礼を受けたのは、ジャワ王の支配を拒絶して、自ら過去のシュリーヴィジャヤ＝パレンバン王国の栄光を復活させる象徴的意味合いが強かったと考えられる。この際、アビシェーカ儀礼によってパラメスワラが獲得したとされる靈的な力を信じ、この王に自らの資源や王国を委ねたとされるのが、今日のシンガポールの南域、リアウ群島のビンタン (Bentan) 島の王であったとされる。それはビンタン島が從来、国際的商業中心地としてのパレンバン王国の重要な拠点として機能してきた経過があり、自ら多くの船と従者である海洋民の機動力を備えてきたビンタン王は、パレンバンの栄光の再生を期待していたからとされる。つまり、このビンタン王を媒介としてパラメスワラの支配下に、これらの海洋民が新たに従えられることになったのだという (Andaya [1975], p. 45/Wolters [1970])。

一方、16世紀前半のポルトガル人、トメ・ピレスが記す、パラメスワラによるマラッカ建国についての次のような記述によても、セラテ人またはバジュとして言及されている海洋民が王国そのものの重要な構成要素であったことが如実に示されている。

「これらのセラテ〔すなわち〕バジュはシンガプラの近くと、パリンバン〔パレンバン—引用者注〕の近くに住む人々で、パラミスラ〔パラメスワラー—引用者注〕がパリンバンから逃げ出した時には彼に従って同行し、その中の三十名は彼の身辺で彼の生命を守っていた。パラミスラがパリンバンに住んでいた期間には、かれらは漁業に従事し、シンガプラに行ってからは、海峡の近くにあるカリマン〔カリモン〕島に住んでいた。そしてパラミスラがムアルに赴くと、この三十名もやって来て、今日マラカ〔マラッカー—引用者注〕と呼ばれている場所に住んでいた。」(トメ・ピレス [1966], pp. 384-385)

同じように、パラメスワラとセラテ人との関係についてのバロスの次のような記述も興味深い。

「パラミソラ〔パラメスワラー—引用者注〕がシアン王の怒りから逃げ出した時、彼はセラテと呼ばれる人々を従えていた。[中略] かれらの好意と援助によって彼はシンガプラの領主となり、そこを五年もの間保持したのである。[中略] セラテ人は陸よりも海上でより多く生活し、陸地に住むことなく、(海上で)子供を生んで育てるのである。しかしきれらはシンガプラやその支配下にあるすべての島(の人々)を憎んでいたので、あえてこれらの地域に帰ろうとはせず、現在マラカが位置している河の沿岸で生活するようになった。[中略] かれらが最初に造った集落は、現在われわれが持っている要塞の背後の山にあった。かれらはそこで生活様式がなかば野蛮な土着の人々を発見した。かれらの言語は元来のマラヤ語で、これらの地域の人々は皆これを使い、それによってこのセラテ人たち(のいうこと)も相手に理解されたのである。最初、両者の間には生活様式の違いから対立があったが、セラテ人がねんごろになった婦人たちを通じて皆一緒に集落に住むようになった。しかし、かれらの間ではたがいに慣れた生活の手段が維持され、セラテ人は海から(獲物を)持ち帰り、マラヨ人は陸地で果実を集めていた。」(トメ・ピレス [1966], p. 385 〈生田ほか注〉に引用されているバロス〈Barros〉の1778年の記述)

ここでは「セラテ人」と称する海の民がマラッカ王国の建国に不可欠な役割を持っていたことが示されていると同時に、陸の民としての「マラヨ人」との民族的共生関係らしきものが当時展開していたことを示しているようで興味深い。

またセラテ人と先述のピンタン島との重要な関わりについては、トメ・ピレスによる、マラッカ支配下の地域・民族に関するセラテ人自身についての次のような記述によって、具体的な情報が提示されている。

「セラテ人：セラテ人は盗みを働く海賊で、小さなパラオ〔船—引用者注〕に乗って海上に赴き、可能な所で掠奪する。かれらはマラカに対して服従している。かれらはピンタン島を根拠地にしている。かれらはマラカ王から要請された時には無償で食糧だけをもらって、漕手を提供する。そして毎年何ヵ月かかれらを提供しなければならない時にはピンタンの総督がかれらを引率する。」(トメ・ピレス [1966], p. 444)

先ほどのアンダヤによれば、ピンタンの人々のマラッカ王朝に対する忠誠心は、シュリーヴィジャヤ＝パレンバンのマハラジャたちがマレー世界の海域で主導権を握り、リアウ＝リンガ群島の海洋民たちを自らの統治体系と繁栄の重要部分として位置づけた遠い過去の時代にまで、おそらく遡るものであつたろうということである (Andaya [1975], pp. 46-47)。さらにこれら海洋民 (orang laut) たちは、7世紀から14世紀にかけてシュリーヴィジャヤ＝パレンバン王国で果たしたのと同じ機能を、17世紀から18世紀初めにかけてのジョホール王国でも果たしたとする (同上, p. 51)。例えば19世紀以前にこのジョホール王国において海洋民たちが持っていた影響力は、マレー人のそれと比べて、かなりのものであつたらしい。1714年のオランダ側の計算によると、ジョホールの王が全領土から集めることのできた6500名の兵士のうち、ほぼ700名はパハン沿岸の沖合いの島々から、2000名がリアウ島嶼部から、500名がリンガ島嶼部から、そして400名がベンカリスやシアック河からの人々だったという。注目されるのは、これらは主に海洋民の地域であるということである。結局、少なく見積もっても、同王国の軍事力の4分の1は海

洋民が構成していたであろうというのがアンダヤの推測である(同上, p. 51)。

海洋民たちの二重の役割, すなわち, 王の艦隊の漕ぎ手および戦士としての役割と, マラッカ海峡およびシンガポール海域における警備の役割を兼ねた状況は, ジョホール王国の存立基盤そのものを端的に示している。つまり王権の周縁部に分節的に統合されつつ, この種の海洋国家に不可欠な構成要件として存在していたと思われる海洋民の位置づけがここに浮上してくる。そしてそれは東南アジア海域世界のさまざまな島嶼国家にしばしば適用される分節国家のモデルにもよく符合する状況であった。

第2節 分節国家モデルと海洋民の位置づけ ——ブルネイとスールー王国——

分節国家 (segmentary state) とは, 元来, サウゾール (Southall) が東アフリカのアルーアの〈初期的国家〉のモデルとして提示した概念で, イングランドのアングロ・サクソン系国家や11世紀フランスの「封建制」, あるいはインド, 中国, アジア内陸部などの「伝統国家」と比較しうるような, 分権化された政体類型に適用される。サウゾールのこの分節国家概念は, アジアにおける国家研究で影響力を持つ, たとえばスタイン(Stein) の南インドのチョーラ王国の分析やタンバイアー(Tambiah) によって提唱された東南アジアの「銀河系政体」(galactic polities) の研究などにも影響を与えたといわれる (Cohen [1993], p. 176)。

特に東南アジアの伝統国家論として大きな反響をえたタンバイアーの, いわゆる「銀河系政体」とは, 近代的な領域国家のイメージとは対照的に, 外縁の境界によってではなく, 王宮や王都などの存在する中心によってのみ規定される政治統合の様式であり, このような大小さまざま「くに」が, それぞれ規模こそ違え, 同型的で自律的な実体をなし, ちょうど個々の天体の間に重力による規則的な関係が成立しているのにも似た, ダイナミックな権

力圏の重層構造の関係を構成しているというように特徴づけられるものであった (Tambiah [1976] / 関本 [1987] / 富沢 [1990])。

他方、フィリピン南部の島嶼国家スールー王国におけるタウスグ族を中心とした政体を分析したキーファー (T.M. Kiefer) によれば、同王国はサウゾールらによって提唱された、次のような特徴を持つ分節国家モデルで説明できるとされるが、それは実質的に、上記の銀河系政体モデルとほぼ同様に定義づけられていることに我々は気づかされる。キーファーによるスールー王国の説明は次のとおりである。

「タウスグ族の国家は、サウゾールらによって表現された分節国家モデルが、どちらかといえば適切に当てはまる。政体を構成するさまざまな単位に機能上の分化が見られないこと。スルタン制によって代表される集権化された政府は存在するが、中央がほとんど統御不可能な周縁的な中心点が複数存在すること。領土的主権は認識されてはいても、それは中央において一層強力で、より遠隔地域になるほど、単なる儀礼上の覇権にすぎないものへと震んでしまうものであること。しかしながら最も重要な点は、中央の権威も周縁部の権威も、相互の鏡像を成していること、つまり、双方ともに、政治システムにおいて、程度の差こそあれ、同質の権利、義務を持つことである。ある意味で、スルタンはたいへん強力な地方首長とみなすことが可能であり、他方、地方首長はたいへん小さなスルタンとみなすこともできるということである（ただし、スルタンのみに限定された儀礼上の役割が若干あるにはあったが）。」(Kiefer [1971], p. 48)

ちなみにセイザー (C. Sather) は、このキーファーによってスールー王国の分析に用いられた分節国家の概念は、同王国のみならず、おそらくボルネオ、フィリピン地域の伝統的諸国家にすべて適用することができるであろうと述べている (Sather [1971a], p. 45)。

スールー王国の場合、その分節国家的構造において、中央の権威や権力が単なる儀礼上の覇権として震んでいくような、分節の末端（周縁）部分の典型的な構成要素として海洋民一般やバジャウ・ラウト（「海のバジャウ族」：漂海

民としてのバジャウ族) の存在が位置づけられている。すなわち、18~19世紀の西欧人の記録には、フィリピン南部においてバジャウあるいはサマル(Samal)と称される諸民族が、スールーのスルタンの政治的支配下にあったことが知られているが、その中でもとりわけ漂海性の強いバジャウ・ラウトは、スールー諸島や更により広範囲にわたって分散居住しながらも、自分たちの上位者に位置づけられる各地の権威者たちと直接・間接にパトロン=クライエント関係を結び、交易活動と身の安全を保証されていた。

上位者とのつながりの質と程度は地域差があり、例えばホロ島周辺では、バジャウ・ラウトはスールーのスルタンの親族や、その他のタウスグ族でダトゥ(datu)の称号を持つ者の直接の配下に入っていたし、一方、スールー王国の南縁を構成していた現在のサバ州(マレーシア)のスンポルナ(Semporna)周辺では、バジャウ・ラウトは、定住化したバジャウ系集団の住む沿岸集落の首長に政治上のパトロン役を求めていた。これらのバジャウ系のパトロンたちはいずれも、一般に、より強力な上位者(その中にはタウスグ族も入っていた)と連帯し、ダトゥの地位を主張したりするなどもあったが、これらの諸関係を媒介としたスールー王国とのつながりは間接的で希薄な性質のものであったとされる。ところでこの種のパトロン=クライエント関係は、下位者であるクライエント側から断ち切ることもありえたという特質を持つ。ただし、パトロンを欠いたまでのバジャウ・ラウトの集落の存続はありえず、新たな保護者は絶えず探し求められた。ある場合には集落内の異なる家族を媒介として、同時に複数のパトロンとの関係を築き上げる者もあった。特にバジャウ・ラウトは移動生活を常態とするため、パトロンによって自分たちが搾取されているとみなした場合は、その上位者から逃げ去るのが普通であったし、それは彼らがパトロンとして選ぶ対象となる政治的指導者同士のライバル関係が常に存在していたので可能でもあったといえる(Sather [1971b])。いずれにせよ、以上からスールー王国の中央から周縁に向かって、権力、権威の強弱・濃淡の差こそあれ、同質的、同型的な政治関係が連鎖し、その周縁部に近いほど、政体の構成要素の可動性が顕著になり、分節国家と

しての特質が露にされるのがよくわかる。

ところでこのスールー王国に先行して、对中国を中心とする海上交易に栄華の基盤を持っていたと考えられるブルネイ王国と海洋民との密接不可分な関係性があったことがブラウン (D.E. Brown) によって指摘されている (Brown [1971], pp. 55-58)。特に15世紀以降、ブルネイの隆盛を支えたと思われる中国側の、真珠、真珠貝、海燕の巣、亀甲などに対する需要に対処するうえでは、海洋民の存在は不可欠であったと考えられる (Sopher [1977], p. 353/Ranjit Singh [1990])。そしてスペイン側の記録によれば、16世紀前半、フィリピン群島南部の多くの地域はブルネイの霸権下にあったか、あるいは、それと連合関係にあったこと、フィリピン南部の漂海民（バジャウなど）は17世紀末近くまでブルネイの支配下にあったこと、ところが19世紀頃までには確実に、フィリピン南部のスルタン国家の支配下にあったとみなされおり、かつての自分たちの支配者であったブルネイを攻撃することすら行うようになったことが知られている (Brown [1971])。

ブラウンの見解によれば、19世紀の時点でボルネオ北部のブルネイの地域には、若干の定住化したバジャウは存在したかもしれないにせよ、大半の漂海民バジャウはブルネイとの関係を確実に断ち切っていたという（同上）。以上の事実は総じて、ブルネイにおける海洋民が、スールー王国の場合と同様、分節国家の構成要素を成す構造を持ち合わせていたことを示唆すると考えてよいであろう。

さて、商業国家的性質の強かったブルネイ王国が衰退し、同海域の霸権が18~19世紀にかけて徐々にフィリピン南部のスールー王国などへと移行したことと、スペイン人のフィリピンへの進出とマニラの勃興は無関係ではないと考えられている。そしてブルネイの衰退に伴って、バジャウなどの漂海民は自分たちの支配者兼交易などの雇用者の代替者を求めたとされる。一方、ブルネイ王国が配下の漂海民を喪失したことの重大さは、ブルネイの王国の形態そのものを想起すれば明らかだと考えられている。つまり、漂海民はこの王国の基礎的資源だったのであり、これを失うことによって、ブルネイは

陸を基盤とした国家への変貌を余儀なくされたが、それにしては条件が貧しかった。その意味で、漂海民の喪失こそがブルネイを衰退させたのであり、それはブルネイの歴史における決定的な「事件」であったという解釈すらある（同上）。

以上見てきたように、東南アジア海域世界東部の諸国家においても、漁撈・交易を基盤とする人的資源に本質的に依存した構造を持ち、その要といつてもよいような重要な位置を、可動性を備えた漂海民や海洋民一般が占めていたらしいことがわかる。彼らは形式上は、分節国家の周縁部、末端部分に位置づけられようが、実質的にはさまざまな大きさの分節諸国家が、相互にそれぞれの周縁部で少しづつ重なり合う構造が展開していたのであり、この重なる部分に位置した海洋民こそが、歴史上これらの国家の存亡の鍵を握っていたとさえ考えられていることをここでは確認しておきたい。

第3節 マレーシア、サバ州海域のバジャウ社会の現在

これまで歴史上の海洋民と東南アジア島嶼国家との関係を概観してきたが、ここからは現マレーシア連邦の1州を構成するボルネオ島のサバ州東部でのバジャウ社会の実例を示し、現在的に捉えられる彼らと国家（権力）との関わりの特質を、先行研究および筆者自身の現地調査によるデータを併用しながら、探ってみることにする。

サバ州東部のバジャウ（あるいはサマ）は、既述のように、一方では東北方向に隣接するフィリピンのスールー諸島との歴史的、社会的つながりが深く、また他方では、東南方向にインドネシアのスラウェシ島や東インドネシアのバジャウ社会と関係を有する人々も少なくない。

サバ州近辺では、先述のように、海上の家船生活を主とする漂海民の性格が強い人々をバジャウ・ラウト（Bajau Laut：「海のバジャウ」）と称し、陸での定住生活の度合いの強くなっているバジャウ・ダラット（Bajau Darat：



写真1 バジャウ・ラウトの女性（マレーシア、スンポルナ）



写真2 バジャウ・ラウトの墓地（あの世においても船で航海する姿が印象的）

「陸のバジャウ」)から区別することがある。バジャウ・ラウトはサマ語系の言語を話すグループのひとつだが、このサマ語系の諸民族は東南アジア土着の民族言語集団の中でも、おそらく最も広範に分布する人々であるといわれる。このサマ語系の人々は、フィリピンのパラワン島東部やスールー諸島からボルネオ東岸、さらに南方ではスラウェシから東インドネシアのフローレス島やモルッカ諸島南部に分布する。サマ語系の人口は37万人を超えるという説

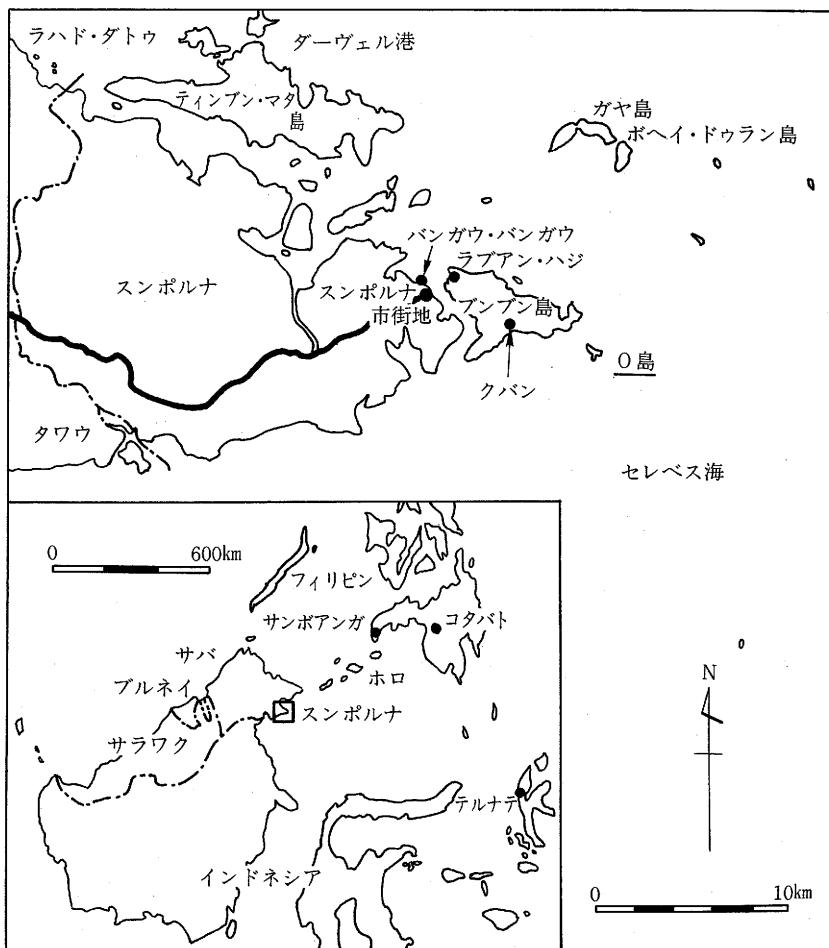
もあり、その中でバジャウ・ラウトは1万5000人から2万人を数えると推測される。サマ語系人口の中心地はフィリピンのスールー諸島で、そこでは21万3000人を数えるという (Sather [1985], p. 166)。

サマ語系の人々の原郷は、言語学的証拠によれば、スールー＝サンボアンガ地域東部にあったといわれる。そこから、ヨーロッパとの接触以前に、ボルネオや東インドネシアに広がっていったとされる。セイザーによれば、1985年現在で、サバ州には7万2000人の、またインドネシアには9万人のサマ語を話す人々がいたという (同上, pp. 167-168)。過去においては、サマ語系の民族は、前節で述べたようなブルネイ・マレー人やタウスグ族のほか、ブギス族、マカッサル族、テルナテ島民などの他の民族集団の支配する、地域的な交易国家における周縁的な被治者層を形成していた (同上, pp. 167-168)。サバ州東部のスンポルナやスールー南部では、バジャウ・ラウトは、他のサマ語系の人々によって「サマ・パラアウ」(Sama Pala'au) あるいは「ルワアン」(Luwaan) の他称で知られている一方で、自称としては「サマ・ディラウト」(Sama Dilaut) あるいは「サマ・マンディラウト」(Sama Mandelaut) (いずれも「海〈海洋〉のサマ」の意) を用いている (同上, pp. 167-168)。

サバ州東南部のスンポルナ海域 (図3参照) は、サバ州の海域の中でもきわめて広域にわたる珊瑚礁の海をもち、水産資源の豊かな地域であって、バジャウ・ラウトの重要な生活圏を提供している。

このスンポルナ海域のバジャウ・ラウト社会の先駆的な調査研究を行ったセイザーによれば、同地域のバジャウ・ラウトに言及した最も古い記録は、19世紀中葉のオランダ人役人デヴァール (Dewall) によるもので、それによると、1849年、スンポルナからやって来た家船の漂海民がカリマンタン東部沿岸に到着したという。この報告によると、このような漂海民一行の訪問は毎年行われていたようで、この一行はディナワン (現在のダナワン) 島の人々であったという。このダナワン島はスンポルナ海域の中でも、知られている限り最も古い沿岸集落のひとつであった所である。19世紀には、ダナワン島社会の指導者たちは、近くのシパダン島で海亀の卵を採集する独占的権利を、

図3 サンポルナ海域の位置



(出所) Sather [1985], p. 169より作成。

スールーのスルタンから与えられていたという (Sather [1985], p. 168)。

この、やや遠隔の島ダナワンは別として、サンポルナ海域でもうひとつ最古のバジャウの沿岸集落とされるのが、サンポルナの町に対峙してあるブンブン島南部のクバン (Kubang) (図3) である。筆者が1994年9月にサンポル

ナを訪れたときに、MUIS（サバ州イスラーム評議会）に勤務する土地の古老から受けた説明によると、現在スンポルナ海域に暮らすバジャウは大きく3種類の範疇に分けられるということだった⁽¹⁾。それは、第1に、バジャウ・クバン族 (suku Bajau Kubang) であり、この地域に最も古くから定着したバジャウである。第2が、バジャウ・パラウ (Bajau Palau) と称される人々で、いわゆる家船で漂海民としての生活を維持しているバジャウ・ラウトを指す。第3に、近年フィリピンから難民その他として同地域に流れてきたバジャウの人々がいるという。ちなみに、第1の範疇のバジャウつまりクバンの人々は、この古老的説明によれば、マレー半島のジョホール (Johore) 起源であるというが、実は、この地域のバジャウのジョホール起源説は、このほか同様に古いバジャウの沿岸集落をもつことで知られるO島（後述）をはじめ、この周辺海域一帯の住民たちに広く流布した伝承になっているのである (*British North Borneo Herald*, April 1, 1933, pp. 64-65, 72)。

一方で、クバンの村人たちとは、この周辺では最も伝統に固執する保守的な人々として認識され、部外者との接触を嫌うということでも知られている。近年のフィリピンからの難民として到来したバジャウも、このクバンの村人たちからは決して受容されることなく、この地に居を構えることは許されたためしがなかったという。クバンの村人たちとは、伝統的に村内婚を繰り返し、村人同士はその結果として、互いに多くが親族関係の網の目で結ばれていいると自認し、強固な連帯感を共有している。

このクバンを起点として、初期的なバジャウの沿岸集落が同じスンポルナ海域のO島やダナワン島、ムナムピリク島などに広がったという伝承があり、これらの古い島々は、現在の同海域でも、最も伝統的なバジャウ社会の代表として認識されている。これらの伝統的バジャウ集落は、いずれも定住化の度合いがかなり進行しているバジャウ社会であり、特にその典型であるクバンのバジャウは、第2範疇のバジャウ・パラウを「低い階層」の人々として捉え、また、「宗教（＝イスラーム教）を持たない」、「文明化していない」、「異教徒」等々としてみなしているといわれる。

クバンの人々についてはセイザーも言及している。彼によると、「クバン」の名称は、O島およびこれに隣接するブンブン島南岸を含む地域を指すともいう。この地域は巨大な珊瑚礁がある種の自然のシェルターの役割をしてこの沿岸集落を取り囲み、海からの攻撃を受けにくく入り江を持っていて、地域間交易の焦点のひとつとして機能してきたという。19世紀末まで、海燕の巣やフカヒレ、ナマコ、真珠貝、海亀の卵、ダマール（樹脂）の品々や奴隸などを交易対象として、ボルネオ東岸、スンポルナ自体、そしてスールーのスルタン王国の主要貿易港などを結ぶ交易ネットワークが機能していたようで、クバンの人々はその仲介商人としても活動していたらしいのである（Sather [1985], p. 170）。そこで次節ではスールー諸島を含む、より広域的な地域枠組みの中で、このスンポルナ海域のバジャウ社会を位置づけてみることにする。

第4節 「エスニシティ化」現象と現代における分節化

スールーのスルタン王国は、15世紀のイスラームの到来の後、集権化された政体として勃興したが、その権力の中心地はホロ（Jolo）島であり、スールー諸島の中でも比較的人口の多い中心的な島々の中にあった。ここにスルタンの宮廷や国家の主要港や商業中心地がおかれた。しかしながら、既述のように18世紀や19世紀初期の権力の絶頂期においてすら、スールー王国はゆるやかに統合されているにすぎない国家であった。この王国の支配層を形成していたのがタウスグ族であり、スルタン職をはじめ、世襲的貴族層を構成するダトゥ（datu）の称号を独占した。ところがパーレセン（Pallesen [1977], pp. 338ff）によると、タウスグ族自体の起源は、サマ系の人々が交易のため中部フィリピンに進出した結果に由来するという。特にサマ族男性とビサヤ族女性から成る二言語使用の交易コミュニティが、その延長として13世紀にフィリピン南部のホロ島に成立するようになった。当時ホロ島はすで

に中国とマレー世界東部を結ぶ大商業センターになっていた。この地の利を得て、この複合民族的交易コミュニティは勢力を伸長させ、ホロ島および近くの主要な島々に定着していたサマ語系の住民を包摂していったという (Sather [1984], p. 5)。

そしてセイザーによれば、このように元来はサマ系と同根であるにもかかわらず、イスラームの到来とスールー王国の成立を契機に、公式的に支配層を形成した人々が「タウスグ族」として、他のサマ系の人々との差異性を主張するようになったということになる。フレイク (Frake [1980], p. 315) は、このようなプロセスを「エスニシティ化」(ethnicization) と呼んだ。このタウスグの事例でいうなら、もともと位階や政治的地位の差異として出現した現象に、エスニックな意味が付与され、それが逆に、言語、文化、出自などの差異に還元されて理解される状況をいう。異なるアイデンティティ意識には、神話的な「歴史」の創出が伴うもので、それによれば、「タウスグ族」はスールー地域の「先住民」であり、「サマ族」は新参者あるいは来訪者と認識される（同上, p. 315）。

一方、スールー諸島と関係の深いスンポルナ海域においては、伝統的な政治的、社会的上位者としてのタウスグ（マレーシア、サバ州では、スルック〈Suluk〉と称されるのが一般的である）が、同じくスールー出身ながら、同海域に来訪し、沿岸集落を形成しているバジャウ（サマ）の後を追うように隣接地域に集落を形成するケースが少なくないことを各地で筆者は観察している。つまり、伝統的なスンポルナ海域での両者の民族間関係は、上述の歴史認識（先住性の強いタウスグと、これに遅れて来訪し、定着し始めたバジャウという認識）が実態としては逆転している。これは基本的には、スールー地域でのタウスグの影響下から逃れようと移動してきたバジャウがこの地に多いことによる。ところで重要なことは、近年の短期間（10年、20年といったタイム・スパン）のレベルでの、このようなバジャウ・タウスグ間の差異性は、スンポルナ海域内での、より古くから集落形成をしていた（そしてマレーシア国籍をも取得して久しい）先住のバジャウと、より新しく来到したバジャウとの間で強調さ

れる「先住性」の差異に比べれば、取るに足らないものと考えられることである。これはある意味では、同じバジャウとしての民族的連續性よりも、「マレーシア」系のバジャウと「フィリピン」系のバジャウ（およびタウスグ）との不連続性を強調する指向性を示しているとも考えられる。いずれにせよ、ここでむしろ興味深いのは、上述したのと同じような「エスニシティ化」の原理は、バジャウ（サマ）同士の、先住性の度合いに基づく差異性の主張において、明示的に繰り返し示されていることである。要するに、前節で示したようなクパンのバジャウ（サマ）を中心とした、先住性と「文明化」（特にイスラーム化）を基準とする、バジャウ集団相互の異化作用が見られ、それが一種の民族分類にも似たかたちで行われているのである。

これに関連して、「陸のバジャウ」（Bajau Darat）と「海のバジャウ」（Bajau Laut）の差異に関する前者側の説明を、サバ州東岸の各地で聞いてみると、幾つか、反復して主張される共通項が浮かび上がってくる。それは次のようなかたちで挙げられる。

- (1) イスラーム教受容の度合い。陸に定着したバジャウ（サマ）は、ほとんど声をそろえて、バジャウ・ラウトには「宗教(agama)がない」という。海上の家船生活を基本にするのでモスクも持たず、礼拝などもせず、また人が死んでもイスラーム教の定めるところに従わず、ただ単純に埋葬するだけで、『コーラン』を詠むこともしない。
- (2) 生活様式の差異。バジャウ・ラウトは家屋に住むより船（家船）の上を好む、年少の少女は半裸のまま放っておく、など。
- (3) 「人種」的特徴。すなわち、バジャウ・ラウトは髪の色が黄色い、足の指が扇状に開いている、など。
- (4) 階層の差異（婚資の差異化によって身分の高低差を示す、など）。

一般的に、陸に定着しているバジャウ（サマ）は漂海民としての海のバジャウ（バジャウ・ラウト）よりは先住性を主張する傾向にあり、実際そのように認識しているようである。また(1)や(2)は特に、前者にとっての「文明」に対置される「未開」度の指標となっていると考えられる。

次に、クバン村と同様、スンポルナ海域でも古い歴史を持つといわれるO島のバジャウ社会の事例を、1992年に筆者が行った調査に依拠して具体的に検討したいと思う⁽²⁾。

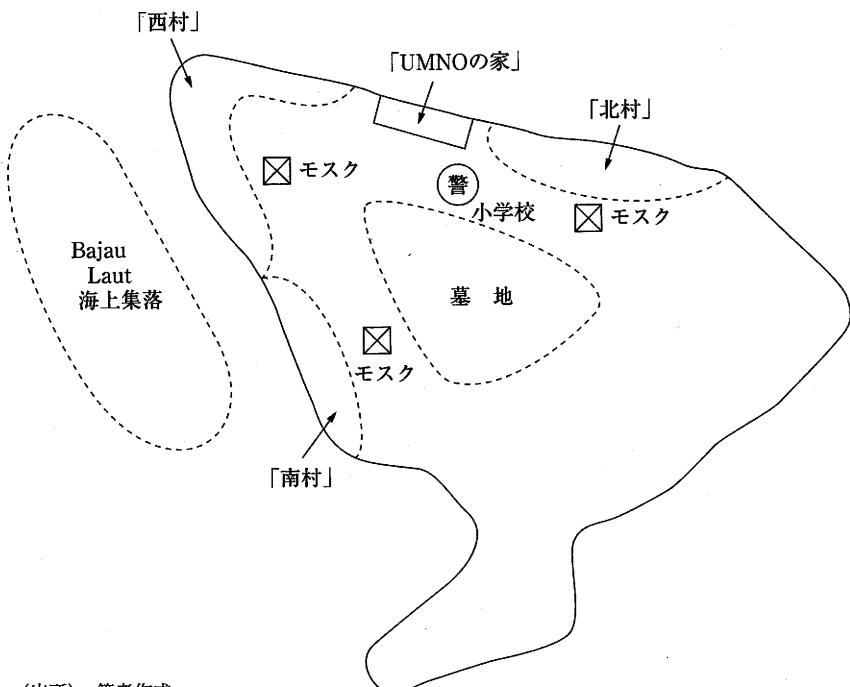
O島はクバン村のある島に対峙しており、古くからバジャウ集落の見られた島であるが、この島は現在、淡水に恵まれず、飲用や水浴に適した井戸や水場がない。この島のバジャウ集落（すべてバジャウだけの島である）は三つに分かれ、北村、西村、南村から構成されるが（いずれも仮称）、3集落とも島の沿岸部に沿うように隣接しており、南村の端から、北村の端まで歩いても20分足らずでたどり着けるほどの近さである（図4参照）。

この3集落の各世帯数は1992年10月の調査時に筆者が確認したところでは、それぞれ13軒（南）、20軒（西）、11軒（北）であった。これら44軒はいずれも海岸部の水上家屋の形式で建てられており、いわゆる典型的な沿岸集落を形成していて、陸と海の境界部分をまたぐ様相を呈している。またこれらはほぼ一様に、トタン屋根を採用し、そこから得られる雨水を集める貯水槽を持つ家々も少なくなかった（ただし、壊れて使いものにならない貯水槽も目立ったが）。

このO島にはこの他、別種の形式の家屋が2種類あった。一つは、島民たちによって「UMNOの家」（マレー語で‘rumah UMNO’）と称されていた家屋群で、高床でない木造の画一的なバンガロー・スタイルの家屋であり、これらが計9軒あった。これらは沿岸集落の家屋群と異なって、高床式をとらず、より内陸側の地上に建てられているのが顕著な特徴であった。UMNOとは、マレーシア連邦政府連合与党の主軸をなす統一マレー国民組織のことであり、島民の説明によると、選挙対策のためUMNOが資金を提供して建築した住居が「UMNOの家」であって、特に貧困な島民に配分されたという。実際にはUMNO支持者の多い南村村民に6軒が、北村村民に2軒が、そして、当時UMNOとライバル関係にあったサバ州政府与党のPBS（サバ統一党）支持の村長を持つ西村の村民には、わずか1軒が配分されたのみという。

O島のもう一つのタイプの家屋群は、近年フィリピン・スールー諸島方面

図4 マレーシア、サバ州、O島概略図



(出所) 筆者作成。

から流れて来たバジャウ・ラウトの海上家屋群であり、これは同島の、特に西村の沖合いに建てられた海上家屋群である。島民の沿岸集落との共通項は、木造の杭上（高床式）家屋である点であり、他方、顕著な差異点は、トタン屋根ではなく椰子の葉を葺いた屋根で統一されていることで、また、こちらは住居というよりは、一間だけの休息場といった趣であるということである（椰子の葉など屋根の素材は、椰子林を所有する島民から譲ってもらい、その礼として、魚などの海産物を提供したという）。この海上集落は、珊瑚礁の浅瀬によって、島の住民とは常に相互往来が可能なほど至近距離にあり（筆者の目測では、おそらく100メートル足らず程度）、特に干潮の時など、このバジャウ・ラウトの子供たちはカルダンと称する、木製の「竹馬」に乗って、あるいはボッゴと称

するくり船に乗って（写真3参照）島に上陸し、売店で駄菓子やタバコを買ったり、地上で走り回って、土の上で遊ぶのを好む。以上のようなバジャウ・ラウトの海上家屋群は、建造中のものも含めて、20軒を超える数が確認された。このバジャウ・ラウトの一群は当時ある中堅のリーダーに統率されて、スルー諸島南部のタウイタウイやシアシなどから到来した集団であり、このリーダーによると、1980年代にこのO島沖に海上集落を作り始めたという。

このバジャウ・ラウトたちの到来時、このように島の至近距離に海上集落を形成する許可を与えたのが、西村の村長であった。ちなみに北村村長はバジャウ・ラウトを迎えることに強く反対であったにもかかわらずである。ここで大いに注目されるのは、漂海民バジャウ・ラウトのリーダー格の者が、すでに定住生活している島のリーダー（この場合は各村長）のいずれかと個別的に関係を結び、その保護下に入ることによって、結果として、双方の集団（の一部）の緩やかな連結が実現している点であり、これは構造的にみれば、



写真3 バジャウ・ラウトの子どもたち
(マレーシア,O島沖の海上集落)

先述の分節国家のモデルにそのまま対応していると言ってよいのではなかろうか。もう一つ興味深い現象は、この島では近親者間で、対立的な政党支持の傾向が広く見られることである。数例を挙げれば、当時、南村村長はUMNO支持者であったが、村落開発委員（JKKK）を務めていたその兄弟はPBS支持を表明しており、またその第1イトコで村のイマームを務める者はUMNO支持者であった。また、北村村長もUMNO支持者だったが、その息子で村落開発委員を務めていた者はPBS支持を、一方、その娘の夫で同じく村落開発委員の任にあった者はUMNO支持を表明していた。ちなみに西村村長はPBS支持で、同時に、先述のとおり、バジャウ・ラウトの受容と関係構築に積極的であった。

以上のような、きわめて近しい親族間で見られる対立政党支持の現象は、この場合、どう解釈するのが最も適切であろうか。この点で印象的なのは、島民による次のような説明である。すなわち、UMNOとPBSの双方に関わりを持っていれば利益がある、ということである。つまり、近親者間で異なる支持政党を持っていれば、政権が交替しても安全であるということなのである。このような発想は、すでに陸（島）での定住生活をしており、現代国家の行政機構に組み込まれているバジャウ（サマ）村落において起きている現象ではある。しかしながら、歴史上、時の権力の盛衰を機敏に感知し、相対立する権力の間を容易に移動し、最適のパトロンを、あるいは重複して複数のパトロンを追求してきたバジャウの生存戦略が、現代国家やそれを動かしている政党政治と関わる基本姿勢に連綿と受け継がれているようにも思える。また更に、島の定住化したバジャウ（サマ）[の一部]と漂海民のバジャウ集団との関係構築のあり方自体が、従来からの分節国家の周縁部分の存立構造をそのまま提示していると理解され、これはある意味で現代版の分節化現象といえよう。

本章では、以上のように、東南アジア海域世界における伝統国家から現代国家におよぶ政体と海洋民との関係をやや早足に概観してみた。きわめて大ざっぱな素描にとどまらざるを得なかつたが、基本的にはこのような視座は、

同時に今後の同地域の政治・社会動態を把握するうえでも不可欠であろうと筆者は考えている。

[注] —————

- (1) 平成 6 年度文部省国際学術研究「変動する東南アジアにおける社会倫理の人類学的研究」(代表: 田村克己助教授: 課題番号 06041128) の一環として行われた調査資料による。なお調査はマレー語を媒体に、バジャウ語の通訳を用いて行った。以下、同様。
- (2) 平成 4 年度文部省国際学術研究「多民族国家マレーシアにおける『共同体』の総合的研究」(代表: 宮崎恒二助教授: 課題番号 03041033) によって行った調査資料による。この際の資料収集に関連して、筆者を Universiti Kebangsaan Malaysia (マレーシア国民大学), サバ・キャンパスの研究員 (research affiliate) (1992年 8 月 21 日 ~ 10 月 16 日) として受け入れてくれた Mohamed Yusoff Ismail ならびに Mohamed Dahlan Haji Aman 両先生に対してこの場を借りて謝意を表したい。

[参考文献]

〈日本語文献〉

- 関本照夫 [1987], 「東南アジア的王権の構造」(伊藤・関本・船曳編『現代の社会人類学 3』東京大学出版会)。
- 鶴見良行 [1981], 『マラッカ物語』時事通信社。
- 床呂郁哉 [1992], 「海のエスノヒストリー：スールー諸島における歴史とエスニシティ」(『民族学研究』第57巻第1号)。
- 富沢寿勇 [1990], 「王権観念の原理と諸相」(土屋健治編『講座東南アジア学(六) : 東南アジアの思想』弘文堂)。
- トメ・ビレス [1966], 『東方諸国記』(大航海時代双書V), 岩波書店。

〈外国語文献〉

- Andaya, L.Y. [1975], *The Kingdom of Johor 1641-1728: Economic and Political Developments*, East Asian Historical Monographs, Kuala Lumpur: Oxford University Press.
- Anonymous [1885], "Early History of Northern Borneo (From British North Borneo, 1885)," in *British North Borneo Herald*, April 1, 1933 [再所収].

- Brown, D.E. [1971], "Brunei and the Bajau," *Borneo Research Bulletin*, Vol. 3, No. 2.
- Cohen, P.T. [1993], "Order under Heaven: Anthropology and the State," in G. Evans ed., *Asia's Cultural Mosaic: An Anthropological Introduction*, New York, London, Toronto, Sydney, Tokyo, Singapore: Prentice Hall.
- Frake, Charles O. [1980], "The Genesis of Kinds of People in the Sulu Archipelago," in *Language and Cultural Description: Essays by Charles O. Frake*, Stanford: Stanford University Press.
- Kathirithamby-Wells & J. Villiers ed. [1990], *The Southeast Asian Port and Polity: Rise and Demise*, Singapore: Singapore University Press, National University of Singapore.
- Kiefer, T.M. [1971], "The Sultanate of Sulu: Problems in the Analysis of a Segmentary State," *Borneo Research Bulletin*, Vol. 3, No. 2.
- Palleesen, A.K. [1997], *Culture Contact and Language Convergence*, Ph. D. dissertation, University of California.
- Piper, M. [1984], "Settlements on Eight Semporna Islands," *Sabah Society Journal*, Vol. 7, No. 4.
- Ranjit Singh, D.S. [1990], "Brunei and the Hinterland of Sabah: Commercial and Economic Relations with Special Reference to the Second Half of the Nineteenth Century," in J. Kathirithamby-Wells & J. Villiers eds. [1990].
- Sather, C. [1971a], "Traditional States of Borneo and the Southern Philippines," *Borneo Research Bulletin*, Vol. 3, No. 2.
- [1971b], "Sulu's Political Jurisdiction over the Bajau Laut," *Borneo Research Bulletin*, Vol. 3, No. 2.
- [1984] "Sea and Shore People: Ethnicity and Ethnic Interaction in Southeastern Sabah," *Contributions to Southeast Asian Ethnography*, 3.
- [1985], "Boat Crews and Fishing Fleets: The Social Organization of Maritime Labour among the Bajau Laut of Southeastern Sabah," *Contributions to Southeast Asian Ethnography*, 4.
- Sopher, D. [1977], *The Sea Nomads: A Study of the Maritime Boat People of Southeast Asia*, Singapore: National Museum.
- Tambiah, S. [1976], *World Conqueror and World Renouncer*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Warren, J.F. [1971], *The North Borneo Chartered Company's Administration of the Bajau, 1878-1909: The Pacification of a Maritime*,

- Nomadic People*, Center for International Studies, Ohio University.
- Wolters, O.W. [1970], *The Fall of Srivijaya in Malay History*, Ithaca: Cornell University Press.
- Yap Beng Liang [1993], *Orang Bajau Pulau Omadal: Aspek-Aspek Budaya*, Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.